

■研究・実践の課題（テーマ）

新型コロナウイルス感染症流行下における児童の給食の楽しさとエゴ・レジリエンスの関連

■主任研究者 安達内美子

■共同研究者 上原正子、足立己幸

■研究・実践の目的、方法、結果、考察や提案等の概要

【目的】

2020 年からの新型コロナウイルス感染症の世界的大流行下において、学校給食では級友たちと話さずに食べる「黙食」が行われるなど、給食の時間の子どもたちの過ごし方について変化がみられた。このような変化は、「食を営む力」の形成に何かしらの影響を与えていることが考えられる。しかし、一方でこれまでに培ってきた「食を営む力」を発揮して、自分たちなりに、給食の時間を楽しもうとしている子どもたちの存在も確認してきた。

制約や制限がある条件下においても、自分なりに給食の時間を楽しむことができる「食を営む力」を明らかにすることは、食に関する指導および給食の時間の改善に寄与すると考えられる。

そこで、給食の時間の変化に対して、自分なりに給食の時間を楽しむことができている児童と、日常的に柔軟に自我を調整し、状況にうまく対処し適応できるエゴ・レジリエンスとの関連を明らかにする。

【方法】

2022 年に愛知県 A 小学校 5 年生の 49 名に調査日の給食の楽しさ、一部修正した小学生用 Ego-Resiliency 尺度について集合法による自記式質問紙調査、現在の給食の時間と理想の給食の時間のスケッチ法による調査を行った。質問紙については、給食の楽しい群とその他群に分け(欠損値 1)、エゴ・レジリエンスとの関連を比較した。スケッチについては、現在の給食の時間と理想の給食の時間を比較した。

【結果】

給食が楽しかった者(楽しい群)は 26 名(51.0%)、まあ楽しかった、少し楽しかった、楽しくなかった者(その他群)は、それぞれ 17 名(33.3%)、2 名(3.9%)、3 名(5.9%)だった。楽しい群はその他群と比較して、エゴ・レジリエンス尺度 12 項目の内、「私は、友だちから、いい人だと思われています。」の項目で、あてはまると回答した者の割合が有意に高かった。

因子分析を行った結果、「好奇心」「感情調整」「客観的視点」の 3 因子解に分けられた。「好奇心」の合計点は、楽しい群の方がその他群と比較して有意に高く、Cronbach の  $\alpha$  係数でも信頼できる数値が得られた。

現在の給食の時間のスケッチでは、机を離して描いている児童は23名(47.9%)、同じ向きで食べている複数の人を描いている児童は22名(45.8%)であった。理想の給食の時間のスケッチでは、友だちと一緒に給食を食べている様子、校庭やプール等の屋外での喫食、バイキングやセレクト給食等の給食の内容についての様子を描いている児童がみられた。

#### 【考察】

給食の時間を楽しむことと「友だちからいい人だと思われている」自己肯定感に関連がみられたことは、友だちとの会話だけでなく、その時間を安心して友だちと共有できる心の安定度が給食時間を楽しみと感じる、いわゆる「食を営む力」には重要であると考えられる。さらに、教育的支援としては体験活動等、環境的支援としては普段と違う環境での喫食といった児童の好奇心を高めることが必要であると考えられる。